

## 仙台大学学術集会の抄録

### 第10回学術集会

日 時：平成9年3月11日（火）

主 管：身体運動系

1. 「学校体育における武道について — 中学校の実態調査から」

齊藤 浩二

学校体育における「武道」については、平成元年の学習指導要領の改訂により名称が「格技」から「武道」へと変更となり、中学校では平成5年度から実施され、今年度が二回目になります。そこで、中学校の体育における武道の授業の実態を、捉えることを目的としました。今回は、学校体育における武道の用語について多少触れてから宮城県中学校の実態調査の結果について報告したい。

2. 「円盤投げのバイオメカニクス」

宮西 智久

1994年広島アジア大会における男子円盤投げ決勝の試技を高速度ビデオカメラを用いて3次元動作分析した。全身の角運動量を算出した結果、2つの典型的な変動パターンが観察された。これらの2つの変動パターンは、円盤の加速方法の相違に起因していた。すなわち、ひとつは“スピード優位型”であり、もうひとつは“力優位型”であった。学術会ではこの2つのパターンについて論議する。

3. 「マラソン（42.195 km）レース前後の脚力変化について」

大久保初男

本研究は、大学陸上競技部員男子長距離6名がマラソンレースに出場完走した事によりレース前後の脚筋力（伸展・屈曲）の変化を比較し、競技力向上を考えたトレーニング計画の立案作成の資料にすることを目的とした。脚筋力の最大筋力は、レース前・レース直後7日間の平均値を比較すれば伸展に有意な差が見られ、選手6名の変化も著しかったことから個々に応じたトレーニング計画をすべき結果が得られた。

4. 「サッカーのヘディング技術と閉眼運動との関係について」

中屋敷 眞

本研究は、主観的判断のもと、ヘディング技術の優れた順に上位から10名ずつA群、B群、C群に分類し、この3群間のヘディングの技術差を以下の調査、実験から分析しようとするものである。内容的には、心理的側面と生得的反射運動としての閉眼運動に関連させ、ヘディングに関するアンケート調査とフィールドテスト、そしてビデオによる画像分析から調べた結果、3群間に明らかな相違が認められたことを報告する。

## 第 11 回学術集会

日 時：平成 7 年 11 月 28 日（火）

主 管：スポーツ文化系

講演者：Tony Mason（ウォーリック大学社会史研究所）

通 訳：Oto Thomas

「20 世紀英国のスポーツと社会」

20 世紀においてスポーツは国際的現象となった。そして、数々のスポーツを生み出したイギリス本国でさえ、スポーツは大きく変容することを避けられなかった。英国社会のスポーツはいったいどんな変容を遂げたのか。スポーツの理念はどう変わったのか。英国人にとって、あるいは英国国家にとって、スポーツはどんな機能を果たしたのか。こうした問題を通史的な叙述のスタイルで講演された。

## 第 12 回学術集会

日 時：平成 9 年 7 月 22 日（火）

主 管：健康福祉学科

### 1. 「仙台大学生介護・ターミナルケアに関する意識調査」

作山美智子

平成 7 年に健康福祉学科が開設され、介護福祉養成課程の教育がスタートした。介護・老後・医療に関して、体育大学の学生はどのように考えているのか、特徴等も含めた意識を探りたく、開学から 3 年間に渡って調査を行った。

〈 結 果 〉 回収率：福祉 98.9%，体育 94.2%

介護関心	95 福祉	96 福祉	97 福祉	95 体育	96 体育	97 体育
全くない	2.4	0	0	2	5.6	4.8
ない	2.4	3.2	0	4.6	6.5	5.8
あまりない	9.5	0	0	19.2	15.7	17.3
どちらともいえない	9.5	3.2	5.3	25.8	15.7	33.7
少しある	16.7	9.7	13.2	30.5	35.2	25
ある	59.6	83.8	78.9	17.9	21.3	13.5

### 2. 「最近における韓国の社会福祉事情」

宇山 勝儀

韓国は経済成長を背景に社会保障・社会福祉の給付水準等の向上を図りつつある。しかしわが国が辿ったと同様物質的ないし数量的側面の重視や産業の都市への集中による過疎と過密の同時かつ急激な顕在は、少年非行、児童健全育成阻害要因の多発、介護の社会化、家族および地域社会の社会資源性の減少等の問題を生じている。加えて、北朝鮮問題の緊張と軍事費のシェアの大きさは我が国に見られない特別な要因となっている。

### 3. 「介護および被介護におけるホルター心電図」

無江 季次・高橋 孝

より良い介護技術開発の研究の一環として介護者の介護技術の習熟程度と介護作業中の身体的負担との関係を検討している。家庭で介護をしている 8 人（平均年齢 54.9 歳）と施設の介護従事者 10 人（38.4 歳）に、24 時間記録心電図を装着して介助作業中の心電図変化を解析

すると、家庭介護者では入浴や着衣交換などの介助作業中に心室性期外収縮連発などの不整脈や ST 下降などの虚血性変化をより多く認めた。

4. 「運動、禁煙の健康増進効果に関する学生への介入の試み」

小松 正子 他

運動習慣を持たず、かつ喫煙する大学生 7 名に対し以下の介入を行った。① エルゴメーター 12 回 (1 回 30 分) ② 休止 22 日間 ③ 禁煙 17 日間 ④ 禁煙およびエルゴメーター (12 回)。禁煙にほぼ完全に成功した 1 例での、主な結果は以下のとおりであった。

肺活量 (L) 開始時 3.42 → 運動後 3.68 → 休止時 3.1 → 禁煙後 3.86 → 運動 + 禁煙後 3.94。

HDL コレステロール (mg/dl) 74 → 71 → 47 → 63 → 75。

骨密度 (stiffness) 77 → 80 → 84 → 84 → 90。NK 細胞活性 (%) 59 → 49 → 36 → 49 → 69。

5. 「スポーツ・ビジョンに関する神経学的考察 — 眼球運動を中心に —」

朴沢 二郎

スポーツビジョンは、1978 年アメリカで競技力向上のための視機能の研究として始められて以来、我が国のスポーツ医学領域でも注目されるようになった。その結果、スポーツ選手と非スポーツ選手の差は、“静止視力”よりも“動体視力”により顕著に現れることが明らかにされている。動体視力に重要なのは、“動く指標”を確実に網膜の中心で捉えて明視するための眼球運動である。

筆者はこれまで、身体並びに眼の平衡反射という生理学および病態生理学的立場から眼球運動の研究を行ってきたが、眼球運動を円滑に行うために必要な“視器と迷路との協応”について競技中の実例を交えて報告した。

6. 「身体運動学におけるコンセンサスを求めて」

石川 旦

学術の研究や教育の営みは、基本的には「知」や「技術」を“共有”するためにあるものと考えられる。

人間の身体運動を核とした健康増進、生涯スポーツおよびアスレティックスの専門教育において、それらの基礎となる身体運動科学の基礎的および応用的知識・技術に関して、どのように理解（認識）の共有（コンセンサス）を確立することができるだろうか。この問題に対する専門として他の人々と“共生”する方途を探究することを試みる。